サンプル版

マゾマン高坂猛シリーズ 03

マゾマン高坂猛の淫故恥新

作者：金目

目次

製品版概要.....2

登場人物.....3

第１話　《大人の男大学》入学試験　二次性徴実物提示試験.....4

第３話　淫欲発散ごみ箱射精.....18

奥付.....29

製品版概要

あらすじ

　ケツマ〇コ開花の恩人である八幡に呼び出された猛は、繁華街の一角にあるカラオケスナックに向かっていた。

　そのカラオケスナックにおいて、かつて猛は、《大人の男大学》入学試験という名目で二次性徴の実物提示プレイを味わわされた。

　その思い出と、今夜の羞恥プレイの期待に、猛はスラックスを大きく膨らませていた。

　二次性徴の実物提示回答を全裸で行い、早漏射精を笑われ、ディルドにも劣ると貶められたり、卑猥な落書きを施されたりする猛の痴態や、男たちを喜ばせるために両手とチンポ、ケツでマラカス４丁での裸踊りなど、カラオケスナックを舞台に、猛が様々な醜態を曝け出します。

　過去と現在、猛は羞恥プレイに悶え、アナルセックスへの期待に悶え、アナルセックスに悦ぶ淫乱な姿を曝け出す。

各話タイトルとプレイ内容

序章　　夜の繁華街にて

第１話　《大人の男大学》入学試験　二次性徴実物提示試験

　　全裸、二次性徴解説プレイ、早漏射精

第２話　《大人の男大学》不正受験への懲罰

　　淫語謝罪、スパンキング、落書き

第３話　淫欲発散ごみ箱射精

　　野外露出、オナニー

第４話　《大人の男大学》裏口入試

　　アナニ―、アナルセックス、複数プレイ

第５話　マゾマン高坂猛の二次性徴再試験
　　全裸、二次性徴解説プレイ、早漏射精
第６話　マゾマン高坂猛のマラカス４丁裸踊り
　　裸踊り
第７話　マゾマン高坂猛のアナル善がり淫蕩百頂
　　電動マッサージ機、アナル責め、アナルセックス

　サンプル版では、第１話と第３話を掲載しています。

【お願い】
　この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。
　無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、なりすまし・模倣を目的としたＡＩ・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。
　この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。
　作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

登場人物

高坂　猛(こうさか　たける)
　男。歳。佐渡間高校体育教師、兼、剣道部顧問
　平常時 11.6cm、勃起時 23.7cm のずる剥け。
　クソ雑魚底辺早漏であることから、チンポの偽物である「パチンポ」と笑われている。
　ケツマ〇コ開花の恩義がある八幡に呼び出され、思い出のカラオケボックスでの羞恥プレイに赴く。

八幡(やはた)
　男。猛の出身校のＯＢ。
　猛のケツマ〇コを開花させた男たちの一人。
　大学入学前、そして、体育教師となった現在の猛を用いて、馴染みのカラオケボックスで男たちを愉しませる余興を行う。

第１話　《大人の男大学》入学試験　二次性徴実物提示試験

「ああ、よく来てくれた、高坂。
　助かったよ」
「いえ、八幡さんのお力になれることなら、何でもします」
　丈翼大学入学式を翌週に控えた３月のある夜、ＯＢの一人である八幡に「ちょっと手を貸してくれないか？」と頼まれた猛は、繁華街にあるカラオケスナックにて、八幡と再会した。
　八幡は、過去に猛に様々な調教を施したＯＢの一人である。
　猛は、自分の意志で決断をし、八幡たちによる調教を受け入れたので、調教中の苦悶はあったにせよ、八幡への悪感情はない。
　むしろ、調教の過程でケツマ〇コの快感を教え込まれたことを感謝している。
　おかげで猛は、「ケツマ〇コの奴隷」として、当時の寮の仲間たちに代わる代わるケツマ〇コを可愛がってもらえる、素晴らしい日々を過ごすことができた。
　こうした事情から猛は、体育関係の常である上下関係の遵守だけではなく、恩義ある相手として、八幡からの連絡に応じ、「お力になれることなら、何でもする」とまで言い切ったのだ。
「その言葉を聞いて安心したよ」
「ありがとうございます」
　八幡の言葉に、猛は頭を下げた。
「俺は、何をすればよろしいでしょうか？」
　猛は体育会の常として、そして、ケツマ〇コ調教を施してくれた八幡への恩義として、八幡の求めに応じたい。
　その思いから尋ねると、八幡が満足そうにうなずいた。
「なんでも、してくれるんだな」
「もちろんです」
　八幡からの念押しに、猛は、力強く頷いた。
「よし、それなら早速、あの舞台に上がってくれ」
　猛は、八幡が示した先を見た。
　カラオケスナックの一角には、カラオケ用の器材が置かれた小さな舞台がある。
　カラオケスナックなのだから、誰かが歌っていそうなものなのに、舞台には誰もいない。
　カラオケスナックに入るのは初めての猛は、勝手に舞台に上がってよいものか分からず、店内を見回した。
　店内には、テーブルが４つとカウンター席が４席あり、客が座って酒を飲んだり、軽食を食べたりしている。
　ここはカラオケスナックのはずなのに、誰も舞台に上がろうとしていない。
「八幡さん、勝手に舞台にあがっていいのでしょうか？」
　気になったので猛が尋ねると、八幡が舞台に目をやり、「ありゃま」と呟いた。
「店長、まーた貼り紙落ちてるわ。
　セロハンテープじゃなくて、ガムテープの方がいいんじゃない？」
　八幡がカウンターで料理をしている店長に声をかけた。

「ああ、明後日まで臨時休業にするつもりだから、そのままでいいよ。
　カラオケスナックなのに、機材故障で歌えないんじゃしょうがないしね」
　八幡と店長の会話を聞き、猛は舞台の側を観察する。
　舞台から少し離れた床に、貼り紙が落ちている。
　貼り紙には、「機材故障中」と書いてあり、修理業者の来訪予定は明後日となっている。
　だから、カラオケスナックなのに、誰も歌っていなかったのか、と猛は納得した。
「さて、高坂。
　改めて、舞台に上がってくれるな」
「はい」
　猛は、八幡の指示に従い、舞台に上がった。
「さて、カラオケ機材の故障で消沈している皆さん！」
　猛が舞台に上がった途端、八幡がカラオケスナックに響く声で宣言した。
　猛は、八幡の突然の大声に驚いた。
　カラオケスナック内の客も八幡の声に驚いたようで、八幡に注目している。
「今夜、カラオケの代わりに皆さまの無聊を慰める宴会芸を提供させていただきます。
　舞台にご注目を！」
　八幡の宣言により、猛はカラオケスナック内の客から注目された。
　夜のカラオケスナックだからだろうか、客たちの年齢は壮年から初老の男女だ。
　男性の方が多いが、女性も数名いる。
　客たちに注目された猛は、礼儀として、深々と一礼をした。
「宴会芸の内容は、《大人の男大学》入学試験！
　試験内容は、二次性徴についての正しい知識と実践！
　そして皆さまには、イケメンくんが大人の男に相応しいかどうか、試験官として判断していただきたいのです！」
　八幡の宣言を聞き、猛はゾクッとした。
　八幡の宣言に従うならば、猛はこれから、この場で、己の身体を、いや、裸体を用いて第二次性徴について説明をしなければならない。
　見知らぬ年上相手に、それも女性も含まれる中、全裸になることは、猛にとってとても恥ずかしいことだ。
　けれど、八幡の指示に従うしかないと、猛は、強く強く、感じている。

　この頃の猛は、「恥ずかしい命令に屈服させられたい」という己がマゾヒズムを自覚していない。
　アナルセックス狂いについても、「ケツマ〇コの奴隷」という言葉によって、己の本性ではないと逃げ道を残していた自覚もない頃である。

　故に猛は、ケツマ〇コ調教を施してくれた八幡への恩義と、先輩である八幡に恥をかかせるわけにはいかないという、体育会系の義務感から、八幡の指示に従うしかない、と誤認している。
「よろしくお願いします！」

猛は、先輩である八幡に恥をかかせてはならない、とだけ思い込んだまま、客たちに深々と一礼をした。
客たちは、全裸芸や体育会系のシゴキなどが当たり前のこととして起きていた年代だからか、猛がこれから全裸を披露することへの嫌悪や疑念もなく、一斉に拍手をし始めた。

猛は、シャツのボタンを外し、タンクトップ１枚になった。
幼い頃より剣道に専心してきた猛の筋肉は、西洋彫刻のようにメリハリがある。
厚みのある大胸筋により、猛のタンクトップは盛り上がり、袖口から見える肩回りもがっしりとしている。
毎日のように素振りを続け、鍛錬を続け、稽古を続けた腕も太く、逞しい。
猛は、タンクトップの裾を両手で握り、めくり上げながら脱ぐ。
引き締まった腹筋が露わになる。
腹周りには体毛は見えず、色白の肌と逞しい筋肉により、西洋彫刻のような艶めかしさがある。
続いて逞しい胸板が露わになる。
胸板にも、体毛は見えない。
猛の体毛は、薄く、細く、短く、本数も少ないため、間近で観察をしないと見分けがつかないのだ。
逞しい胸板には、左右に一対、綺麗なピンク色をした乳首が慎ましやかに備わっている。
タンクトップをめくり上げる猛の脇が露わになる。
胸板、腕、背中の逞しい筋肉によって深いくぼみのある脇にも、腋毛は見当たらない。
タンクトップを脱ぎ、猛は上半身を露わにした。
「おお、中々鍛えているじゃないか」
「色白だから心配だったけど、かなり筋肉がついているのねえ」
「筋肉だけなら合格間違いなしじゃないかな」
「これは女にモテモテだろうな」
猛の上半身を見た客たちが、口々に称賛し、笑みを浮かべている。
猛は、客たちの注目と称賛に居心地が悪くなった。
猛にも人並みの見栄があるので、剣道で鍛え抜いた筋肉を褒められることは、悪い気がしない。
しかし、猛はこれから、全裸にならなければならない。
ペットボトル早漏チンポを見られることへの恥ずかしさから、どうしても猛は、落ち着かない気分になる。
けれど、ケツマ〇コ開花の恩義がある八幡に恥をかかせるわけにもいかない。
だから猛は、羞恥を押し殺し、スラックスのベルトを外し、スラックスのボタンを外し、チャックをおろした。
ずもぉん、とチャックから猛の赤いボクサーパンツのもっこりが現れた。
早漏とはいえデカチンの猛は、もっこりが大きく、目立つのだ。
「おやまあ、チンポもデカいじゃないか」

「デカチンがチンポを振り振りするのは面白いわね」
「ああ、今じゃそういうことは、大っぴらには言えないしな」
「よ、デカチン大会優勝候補！」
　赤いボクサーパンツのもっこりの大きさで、客たちが更に騒ぎ出した。
　猛は、極度の早漏であるペットボトル早漏チンポを恥じている。
　だから、もっこりの大きさを客たちに褒められると、客たちを騙しているようで罪悪感が沸き上がり、居た堪れない気分になる。
　スラックスを脱ぎ終えた猛は、赤いボクサーパンツの腰ゴムに手をかけ、腕を震わせた。
　ボクサーパンツを下ろし、ペットボトル早漏チンポを露わにすることが恥ずかしいのだ。

　ケツマ〇コ開花の恩義がある八幡に恥をかかせるわけにはいかない。
　八幡に感じる恩義は、猛にとってとても大事なことだ。
　その一方で猛は、面識のない者たちに、それも女性も含まれる中、全裸になることが恥ずかしい。

　猛は八幡への恩義と、羞恥心の双方に引っ張られ、赤いボクサーパンツを下ろすことができない。
「もったいぶらないで、早く脱いで頂戴な！」
「デカチン見せてくれや！」
「デカチンなんだから恥ずかしくないだろ！」
「デカチン丸出しにしてくれよ！」
　客たちが、ボクサーパンツを下ろそうとしない猛に野次を飛ばし始めた。
　このまま、客たちの期待に応えられなかったら、猛は八幡に恥をかかせてしまう。
　猛は、ケツマ〇コ調教を施してくれた八幡への恩義によって羞恥心を退かせる。
　そして猛は、勢いに任せて赤いボクサーパンツを一気に膝下まで下ろした。

　ぶるるるるん！

「おおおおおおおおおお！」
「こりゃデカいな！」
「うちの旦那よりも大きいじゃない」
「いやはや、ここまでのデカチンは見たことがないぞ」
　これまでの体毛の薄さとは真逆の、黒々としたチン毛が伸びている下腹部にぶら下がっている猛のペットボトル早漏チンポを目撃した客たちが、驚き、騒めき、感嘆している。
　猛のペットボトル早漏チンポは、客たちが驚くように、見事なデカチンである。
　平常時 11.6㎝の陰茎は太く長く、雁首に包皮が留まる天然のずる剥けである。
　雁首は高く、ずる剥けの亀頭は綺麗な童貞ピンクをしている。
　また、猛の玉袋は、陰茎の大きさに釣り合う大きさをしている。
　鶏卵Ｓサイズの金玉が入った玉袋は太々しく垂れ下がっている。
　加えて、猛のペットボトル早漏チンポは、排泄器にして生殖器でありながら、清潔感を保

っている。
　チンカスがついていないことはもちろん、陰茎に浮かぶ血管も見苦しくなく、不潔さや卑猥さを見出すことができないのだ。
　清潔感溢れる爽やかな顔立ちに、色白の肌と鍛え抜かれた筋肉による西洋彫刻のような肉体美、そして、見事な肉体美を損なうことのない清潔感溢れるペットボトル早漏チンポを備えた猛は、稀有なイケメンであると言えるだろう。
「こんなデカチンを勿体ぶるなんて、兄ちゃん、人が悪いなあ」
「そうよねえ、こんなにデカいんだから、恥かしいところなんてないでしょう？」
「それともあれか？
　自慢の逸物だから、期待を煽るために焦らしたのか？」
「こんなデカチンなら、焦らしたくなるのも分かるがな」
　客たちが、猛のペットボトル早漏チンポを称賛し、全裸になるのを躊躇った猛を囃し立てる。
　ペットボトル早漏チンポへの称賛や、即座に全裸になることができなかったことへの揶揄に、猛は恥ずかしさで震えてしまう。
　猛は、見掛け倒しのクソザコ早漏であるペットボトル早漏チンポを恥じている。
　その大きさを称賛されればされるほど、そうした長所を台無しにし、最底辺のチンポにも届くことのない早漏ぶりを突きつけられているようで、居た堪れないのだ。
　見知らぬ大人たちにペットボトル早漏チンポを鑑賞され、称賛される状況に耐え切れず、全裸になった猛は、両手でペットボトル早漏チンポを隠した。
「おいおい、どうしてデカチンを隠しちゃうんだよ」
「私たちは気にしないから、モロ出ししちゃいなさいよー」
「そうだそうだ、隠すんじゃない」
「男らしく丸出しにしろや」
　客たちに囃し立てられ、猛は恥ずかしさで顔を真っ赤にした。
　ケツマ〇コの奴隷として、アナルセックスに耽る日々を送っていたとはいえ、猛にも羞恥心が備わっている。
　アナルセックスで絆を深めた寮の仲間たち相手に全裸を曝け出すことでさえ、猛は恥ずかしい。
　ましてや、面識のない大人たちにコンプレックスであるペットボトル早漏チンポを曝け出すことは、猛にとってなおさら恥ずかしいことなのだ。
　猛は、客たちの視線によって、産毛のように薄く細く、まばらな体毛が逆立つ気がする。
　色白の肌をしているため、猛は羞恥による顔色の変化が表れやすい。
「おいおい兄ちゃん、顔が真っ赤じゃないか」
「あらあらまあまあ、顔を赤くしちゃってまあ」
「もじもじしてどうしたんだよ、兄ちゃん」
　羞恥で真っ赤になった顔を客たちに揶揄され、猛はますます恥ずかしくなった。
　とはいえ、このままペットボトル早漏チンポを隠したままではよくないことも、猛は理解している。
　猛は、羞恥心を押さえ込み、ペットボトル早漏チンポを丸出しにするための勇気を奮い立

たせるため、大きく深呼吸をした。
そして猛は、両腕に力を込め、ゆっくりと両手を腰の後ろで組んだ。
高坂猛という男は、猥雑さとは無縁の姿をしている。
爽やかな顔立ちは、男特有の臭みや生々しさ、淫欲の類を感じさせない、厭味のない印象を見る者に与える。
色白の肌は、それ自体は虚弱さを示すものだが、剣道によって鍛え抜いた筋肉と合わさることにより、西洋彫刻のような健全美を放っている。
二次性徴によって生えるはずの体毛もチン毛を除き、全体的に薄く、細く、短く、本数も少ないため、間近で観察をしないと見つけることも難しい。
体毛が見当たらないこともまた、猛の裸体に彫刻のような印象を与える。
けれど、猛が西洋彫刻ではないことを、下腹部が示している。
下腹部には、チン毛が生えている。
寮の仲間たちとのアナルセックスの日々を過ごしていた頃、猛はチン毛の剃毛をしていた。
自らの手で剃ったり、仲間たちに剃られたり、と、猛のチン毛は剃られてばかりであった。
猛自身、チン毛が生えている下腹部に違和感を抱くほどに、剃毛に慣れている。
それでもなお、猛の股間にチン毛が生えているのは、実家暮らしのためだ。
実家の家族たちは、猛の性癖を知らない。
猛自身、ケツマ〇コの奴隷として、仲間たちに毎日ケツマ〇コを可愛がってもらった、などと家族に話せるはずもない。
だから猛は、同居する家族の目が気になり、チン毛も剃れなくなってしまった。
故に、猛の股間はチン毛が生えそろってしまったのだ。
また、西洋彫刻において、男性器とは小さく、慎ましやかな包茎であることが求められる。
けれど猛のペットボトル早漏チンポは、極度の早漏とはいえ、ずる剥けデカチンである。
チンカスやオナティッシュなどの汚れもなく、清潔感があるとはいえ、平常時でも 11.6㎝のペットボトル早漏チンポは、西洋彫刻の理想とは真逆なのだ。
見事な健全美を備えたイケメンである猛が、全裸であることを恥じ、顔を真っ赤にしている。
見た目の時点で極上の男が、見世物として羞恥に震えている。
カラオケスナックの客たちは、素晴らしいイケメンである猛が、彼ら、彼女らのための娯楽として消費されることに、喜悦を抱きはじめたようで、どことなくサディスティックな雰囲気を漂わせている。
「さあ、イケメンの兄ちゃん、早く試験をしようぜ」
「《大人の男大学》に入学できるか、私たちが見てあげるから！」
「早く俺たちに見せてくれよ、イケメン兄ちゃんの本気の二次性徴をさ！」
猛に野次を投げかける客たちの様子に、猛は、寮生活時代の仲間内での罰ゲームを思い出した。
客たちが何を求めているのか、猛は腑に落ちた。
猛の役割は、客たちを愉しませるために、恥を忍んで恥ずかしい行為を重ねることなのだ。

「それでは、二次性徴について説明させていただきます！」
　猛は、腰の後ろで手を組んだまま、大声で宣言をした。
「まず、脳から分泌されるホルモンの作用で、精巣からテストステロンを分泌します！」
　猛は、保健の教科書と、かつて命じられた二次性徴の実物提示教育を思い出しながら説明をした。
「精巣ってのは、どこにあるんだ？」
「そうだそうだ、説明をするなら、どこにナニがあるのかも、きちんと説明しろ」
　客たちから野次が飛び、猛は恥ずかしくなった。
　見た目は文句なしのデカチンとはいえ、極度の早漏であるペットボトル早漏チンポを、猛は酷く恥じている。
　故に、ペットボトル早漏チンポの一部である金玉を指さし、「これが精巣です」と示すことは、猛にとって羞恥心を煽られる行為である。
　けれど、恥ずかしいからといって野次を無視するわけにもいかない。
　猛は既に全裸になり、二次性徴の説明を始めている。
　ここで恥ずかしがり、中途半端なことをするのは、ケツマ〇コ調教の恩義がある八幡や、猛で愉しんでいる客たちへの不義理である。
　故に猛は、己の大きな金玉を掌で支え、前に突き出した。
「この、玉袋の中に入っているのが、金玉、いえ、精巣です」
　猛の掌に乗った玉袋は、どっしりとしており、中で大量の精子が生み出されていそうなほどだ。
「おお、金玉もデカいじゃないか」
「私たちにも分かるように、丁寧に説明して頂戴ね」
「気をつけます」
　客たちの要求に、猛は頭を下げて返答した。
「精巣からテストステロンが分泌されると、身体の各所で変化が起きます。
　身長が伸び、筋肉量が増大します。
　加えて、声変わりが起き、喉仏が出てきます。
　陰毛や腋毛が生え、陰茎や精巣が――」
「ちょっと待った！」
　客の一人が猛の説明を遮った。
「イケメン兄ちゃん、チン毛以外、毛が生えていないじゃないか？
　きちんと二次性徴しているのか？」
　言いがかりじみた客の問いかけに、猛は言葉に詰まった。
　一応、猛にも腋毛や他の体毛も生えている。
　ただ猛は、チン毛以外の体毛が、薄く、細く、短く、本数も少ないため、近くで観察をしないと見分けがつかないのだ。
　猛は、そうした事情を咄嗟に言葉に出すことができなかった。
　まず、猛にとって全裸を晒すことが恥ずかしいことである。
　面識のない大人たちを相手にして、二次性徴の実物提示をしなければならないことも、猛

にとって恥ずかしいことだ。
　羞恥を押し殺して振る舞っている猛は、想定外の質問にさっと返答するだけの思考力の余裕がないのだ。
「そうだよなあ、チン毛しか生えていないのに二次性徴をきちんとできているとは思えないなあ」
「剃ってるのかしら？　わざわざ剃っているの？」
「もじもじしていないで、答えてくれよお」
　想定外の質問に困惑する猛に、客たちが野次を重ねる。
「ええと、その、生えています！」
　困った猛は、まず、生えていることだけを大声で答えた。
　猛の大声に驚いた客たちが、猛に注目する。
　体毛の有無を確認するために裸体に注目されていると思うだけで、猛は恥ずかしさで心臓が胸郭を突き破りそうだ。
「その、俺は、チン毛以外の体毛が薄くて、細くて、短くて、本数も少ないので、近くで見ないと見分けがつかないんです」
　体毛の薄さについて説明をしただけで、猛は恥ずかしさで呼吸が乱れてしまう。
「じゃあ、私たちの席にきて、きちんと見せて頂戴な」
「俺たちの席にも来てくれよ」
「こっちの席にも、ちゃんと来てくれるよな」
　客たちの更なる要求に、猛はギョッとした。
　猛にとって、舞台の上に立ち、全裸を曝け出すだけで、羞恥の限界に近い。
　だというのに、面識もない大人相手に間近で全裸を曝け出すのは、想像するだけで、猛は恥ずかしさで叫んでしまいそうになる。
　無理です！　と猛は叫びそうになった。
　けれど、その叫びを猛は喉元で押しとどめた。
　今、猛の裸体は、猛の一存で好きにしていいものではない。
　恩義のある八幡に恥をかかせないため、カラオケスナックの客たちの期待に応えるために、消費されなければならないのだ。
「わ、分かりました！
　じゅ、じゅば、順番におかが、いえ、お伺いします！」
　羞恥による震えで言葉を噛んでしまいつつ、猛は客たちの要望に応じるため、舞台から降りた。

　舞台からもっとも近いテーブル席には、壮年の女性が 2 人に壮年の男性が 1 人、そして、初老の男性が一人座っていた。
「あらまあ、間近で見ると大きいわねえ」
「うちの旦那より大きいのは間違いないわね。
　まあ、もう何年も御無沙汰なんだけどね」
「やだもう！」

猛の母親と似たような年齢の女性たちにペットボトル早漏チンポを見つめられ、寸評され、猛は恥ずかしさと居た堪れなさで顔が余計に熱くなってしまう。
「本当に生えているのか、どれどれ」
初老の男性が、猛の太ももを撫で始めた。
寮生活で、仲間たちに急に身体を触られることは珍しいことではないため、初老の男性の手つきに対し、猛は特に反応を返さずに済んだ。
「おや、確かにちょっと毛の手触りがするな」
「本当ですか、班長。
それなら俺も触ってみますわ」
壮年の男性が立ち上がり、初老の男性とは逆の太ももを撫で始めた。
「ああ、たしかに、ほんのちょっと、あるかないかぐらいで、ギリギリ、ありそうな感じだな。
女房が産毛の処理もしているんだけど、女房の肌に比べてちょっと毛があるような感じだ」
「あらまあ、私たちも確認しましょう」
「もちろん！」
壮年の女性たち、猛の母親と同年代の女性たちまでもが、立ち上がり、猛の脇に指を突っ込む。
「あ！」
女性に、それも母親の年齢のような女性たちに身体に触れられ、産毛を探し回られていることに、猛は動揺してしまう。
「おいおい、イケメンの兄ちゃん。
兄ちゃんは今、《大人の男大学》の入学試験を受けているんだぞ。
だったらこんなことで動揺したら駄目じゃないか」
「そうだなあ、女に触られたぐらいで動揺していたら、大人の男は無理だぞ」
壮年の男性と初老の男性にからかわれ、猛は恥ずかしさで混乱し、何をどうすればよいのか分からなくなる。
「まったく、でけえチンポをしておいて、度胸が足りねえなあ」
「こんなデカチンをぶら下げておいて、初心なネンネってのも宝の持ち腐れだな」
壮年の男性が猛の玉袋を握り、初老の男性が猛の陰茎を握り込んだ。
「こ、こまこ、こまります！」
コンプレックスであるペットボトル早漏チンポを握り込まれ、猛は動揺し、言葉を噛んでしまいながら、触られたら困る、と主張した。
「おいおい、困るってのはなんだ？
二次性徴の主役はチンポだろ？」
「だったらチンポの確認も大事なことじゃないか。
まさか、このチンポは不正なチンポなのか？」
「い、ふせ、ち……」
猛は、混乱し、余計に言葉を噛んでしまった。
猛は、己のペットボトル早漏チンポを見掛け倒しだと思っている。

極度の早漏であり、寮の仲間たちにも「大きさは羨ましいけど、猛並みの早漏は嫌だよな」とからかわれるほどの早漏の酷さを、猛は強く恥じている。
また、猛は八幡たちに施された調教において、陰茎増強剤を服用させられ、チンポを大きくさせられている。
陰茎増強剤服用前のの猛のデカチンは、勃起しても 500ml のペットボトルに並ぶことはなく、ペットボトル早漏チンポと揶揄されることもなかったのだ。
チンポの大きさを損ない、猛の男性性を決定的に損なう極度の早漏と、服薬による巨根化の二つを意識した猛は、不正なチンポ、という言葉に反論していいのか、よくないのか、分からなくなってしまったのだ。
猛が混乱し、戸惑っている間に、猛の身体は客たちに弄ばれてしまう。
最初のテーブルの客だけではなく、他のテーブルやカウンターに座っていた客たちも猛に近づき、身体を撫でまわして体毛を探し、そして、入れ代わり立ち代わりで、猛のペットボトル早漏チンポを触り、握り、軽い手コキを施す。
「あ、あわわ、あれで、その……」
極度の羞恥、不正なチンポという言葉への回答、面識のない大人たちにペットボトル早漏チンポを握られ、揉まれ、手コキされている状況に、猛はまともな返答も返せないほどに混乱してしまう。
猛のペットボトル早漏チンポがムクムクと勃起し始める。
「おお、勃起してきたぞ」
「なかなかの大きさじゃないか」
「膨張率も凄いわね。
最近の若い子って色々と凄いのねえ」
客たちが笑い、鑑賞する中、猛のペットボトル早漏チンポが完全に勃起してしまった。
ピンク色の亀頭がパンパンに膨れ、平常時よりも雁首が高くなる。
「見ろよ、この姿かたち。
セックスの矢印じゃないか」
客の一人が、猛のフル勃起ペットボトル早漏チンポについて、寮の仲間たちの一人と似たような表現をした。
「言われてみれば、矢印みたいな形だね」
「この先、おマ○コです、ってか。
ヤリチンの素質十分じゃないか」
「素質どころか、このデカさなら経験済みじゃないのか？」
客たちが猛のセックスライフについてあれこれと憶測を重ねながら、代わる代わる猛の金玉を揉み、フル勃起陰茎を軽く扱く。
猛の鈴口から我慢汁がにじみ出てきた。
「あ、あの、その、困ります！」
ようやく、猛は「困ります」と意思表示をすることができた。
「それもそうか。
二次性徴の回答を俺たちがしたらいけないよな」
客の一人の言葉に、他の客たちが「ああ」「おお」と反応し、納得した様子を見せる。

「さてと、イケメン兄さん。
　二次性徴ならかかせないこと、あるよな？」
「え？」
　猛は、面識のない大人たちにペットボトル早漏チンポを弄ばれたことや、勃起を晒している恥ずかしさなどで、頭が回らず、二次性徴で何を求められているのかが分からない。
　猛は、そもそも今の状況が何なのかを思い出そうとする。

　ここはカラオケスナックで、カラオケ機材が故障中で、使えない。
　それで、ケツマ〇コ調教の恩義がある八幡に命じられた猛は、余興として、客たちの前で、《大人の男大学》入学試験の名目で、二次性徴について己の身体で説明をすることになって、それで、全裸になって……

「あ！」
　猛は、客たちが求めていることに気がついた。
　猛は、二次性徴に伴う男の身体の変化について説明をしていた。
　あとは、生物学的な成熟を示す指標の一つである、生殖能力の有無、つまり、射精能力についてのことで……
　つまり、オナニーだ！
「お、オナニーをすれば、いえ、します」
　猛は、声を震わせ、身体を震わせ、顔も恥辱で真っ赤に染まっている。
　本音を言うのならば、猛は、オナニーなどしたくない。
　極度の早漏であり、寮の仲間たちにも「猛並みのデカチン早漏になるぐらいなら、平凡チンポで十分だよな」と笑われるような早漏だと他人に知られたいわけがない。
　猛にも人並みの見栄があり、己の恥部を喜んで晒して笑いを取るような開き直りはできない。
　ましてや、客の中には、猛の母親と同年代の女性もいる。
　こんな場で、抵抗なく、オナニーができるような開き直りが、猛にできるわけがない。

　けれど、この場でオナニーをしないわけにはいかない。
　この場を設定したのは、ケツマ〇コ調教の恩義がある八幡であり、客たちも、猛の痴態に期待をしている。
　オナニーを拒むことは、八幡やカラオケスナックの客たちへの不義理であり、裏切りだ。
　そのような卑劣な真似をしてはいけないのだ。

　この頃の猛はまだ、「恥ずかしい命令に屈服させられたい」という己のマゾ淫欲に気がついていない。
　責務に従わされたいという己のマゾ淫欲に気がついていない猛にとって、この場でオナニーをすることは、責務でしかない。

「あうっ」

マゾ淫欲を自覚していない猛は、ペットボトル早漏チンポを握っただけでゾクゾクしてしまう理由が分からず、喘いでしまう。
アナルセックスライフを送っていた寮の仲間たちに余興として求められたオナニーよりも、ゾクゾクして、おかしくなりそうな理由が分からない。
マゾ淫欲を自覚していない猛は、支配され、従わされている快感を自覚できない。
「おいおい、なんでそんなに出来上がっちゃってんの？」
「見られて嬉しいのかな、それなら俺らも愉しいけど」
「まさか、露出願望があったのかしら？」
客たちの言葉に猛は反射的に首を振る。
「い、いえいえいえいえ、違います。
たぶん、しばらくオナニーしてないからです。
溜まってます！
その、まだ大学の寮に入れないので、実家暮らしなんですけど、実家だと、あの、その、気軽に処理できないし」
露出願望を否定するために、猛は己の近況をべらべらと話してしまった。
「ああ、親に気がつかれたら居た堪れないもんなあ」
「確かに、家族の性行為なんざ、見たくないもんな」
「寮生活が長いのなら、実家でのオナニーも、タイミングを計りにくいでしょうねえ」
客たちに、理解を示され、同情され、猛は居たたまれなくなる。
「それなら、ここで、気持ちよくぶっ放せばいいじゃないか」
「そうだそうだ、早くセンズリ見せてくれ」
「センズリしたら合格にしてやるよ」
客たちが手拍子をし、「センズリ」と囃し立て始めた。
猛の周囲には「センズリ」という言葉を用いる者はいなかった。
だから猛は、「センズリ」を「自慰、オナニー」の類義語と推測する。
「せ、センズリします！」
猛は、客たちに倣って「センズリ」という言葉を用い、オナニーを始めた。
我慢汁がとぷとぷと溢れ、猛のフル勃起ペットボトル早漏チンポを淫猥に濡らしていく。
「あ、ああ、ヤバイ、ヤバイい」
猛は、いつも通り、寮の仲間たちに「あんな早漏になるより、平凡チンポがいいよな」と笑われる通りの反応をし、腰を揺らし始めた。
「おいおい、見られて気持ちいいんじゃないか」
「はははは、変態だなあ、イケメン兄さん」
「でもまあ、余興だから感じている方が愉しいわねえ」
客たちは、猛の早漏ぶりを知らないため、猛の反応の過敏さを、露出願望の発露と誤解している。
「ああ、ヤバイ、ヤバイ、でそう、でそう、出るうう」
猛は、いつも通りの早漏ぶりを発揮し、ザーメンを受け止めるために左手を亀頭の先にかざしながら、いやらしく喘ぐ。

見られて恥ずかしいのに、母親と同年代の女性にまで見られていて、地獄のように恥ずかしいのに、こんな状況で射精することが……ヤバイっ！

「恥ずかしい命令に屈服させられたい」というマゾ淫欲に無自覚な猛は、八幡に屈服させられ、恥ずかしい行為を実行させられている状況への興奮だと認識できない。
訳も分からないまま、猛は射精のために手コキを早める。
「あああああああああ、イっくうううううううううううううううううう！」
「へ？　冗談だろ」
「早すぎるだろ」
「どっきりかしら」
猛が早漏に相応しい醜態を喘いでいることに、客たちが驚き、困惑する。

どっびゅるるるるるるる！　どびゅるるる！　どっびゅるるるるるるるる！
びゅるるる！　どびゅるるるるるる！

猛の鈴口から大量のザーメンがぶっ放された。
猛のザーメンは常人よりも量が多く、そして、臭いが濃い。
顔、裸体、ペットボトル早漏チンポでさえ、平常時は卑猥さや淫欲を感じさせない猛の中で、ザーメンだけは、どうしようもなく、卑猥で、淫猥なのだ。
猛が喘ぎ、ザーメンをぶっ放すたび、カラオケスナックの中に、猛のザーメンの男臭さが広がっていく。
「ああ、はあ、あああっ、あうううう……」
猛は、喘ぎながら腰を振っている。
腰を振り、喘ぐ猛の姿は、ある条件さえなければ、余興として 100 点満点だったろう。
あまりにも射精が早すぎるので、猛のオナニーは、余興としては物足りないのだ。
盛り上がる間もなく、あっという間に終わってしまったオナニーショーに、客たちは狐に化かされたように、呆けた顔をしている。
射精を終えた猛は、左手で受け止めたザーメンが床に零れないように、掌を上にした。
猛の大きな掌いっぱいに、ねっとりとした濃い白濁のザーメンがたっぷりとへばりついている。
猛は、尿道内に残ったザーメンを右手で絞り出そうとして、手元にティッシュがないことに気がついた。
脱いだスラックスにポケットティッシュが入っているが、右手だけで取り出すことは難しいだろう。
「あの、すいません――」
猛は、ティッシュを使わせてもらうと、声をかけようとした。

「駄目だな」
客の一人が、首を振った。

「ああ、これは駄目だな」
「情けなさ過ぎて、文句も思いつかないわねえ」
　ティッシュを使わせてもらうとした猛の側で、客たちが次々に駄目出しをし始めた。
　ティッシュを使わせてもらえないと、猛はザーメンの始末に困る。
　だから猛は、もう一度、ティッシュを使わせてもらえないか、と頼もうとする。
「こんな早漏じゃ、《大人の男大学》への入学は認められないな」
　客の一人の言葉に、猛は、客たちの駄目出しは、ティッシュのことではないのだな、と悟った。
「ああ、こんな早漏じゃ大人の男として、肝心な務めを果たせないな」
「そうねえ、こんなにも惨めな早漏だったら、セックスなんて無理でしょうねえ」
「セックスできないデカチンが大人の男になれるわけがないよな」
「チンポがデカい分、惨めな早漏だよなあ」
「こんな早漏で、俺たちのような、チンポセックスができる大人の男になれるわけがない」
「立派なチンポをしていても、底辺早漏じゃあ役立たずなんだよな」
「早すぎて期待外れよね、まったく情けない」
「こんな早漏なのに、男として需要があると思ってたのか」
「可愛そうになあ、デカチンだから勘違いしちまったんだな」
「女たちが好きなのは、チンポセックスできるチンポなんだよなあ、分かるかな？」
「マ〇コちゃんも、勝手に一人で先走って終わっちゃうような早漏なんて御免だよな」
「諦めて、おこちゃま学校でデカチン自慢してな」
「おこちゃま学校なら、チンポがデカいだけで注目されるもんなあ。
　セックスすることはないんだから」
「早漏すぎて、ほんっとーに情けないな、お前さん」
「俺が知る早漏だって、もうちょっと持つぞ」
「センズリっつーか、三擦り半でもないんじゃないか、この無様さ」
「こんな早漏で、大人の男なんて、頑張っても無理だよな、可愛そうになあ」
「子づくりできそうな、濃いザーメンも無意味な早漏だなあ」
「イケメン精子を欲しがる連中だって、こんな早漏ならお断りするよなあ」
「ああ、この早漏でイケメン兄さんの価値はどん底だな」
　客たちが次々に、猛の早漏に侮蔑を示し、見下し始めた。
「ううううううう……」
　客たちの侮蔑に、猛は恥ずかしさと情けなさ、己の無様さを突きつけられ、惨めな思いに沈んでいく。

　猛は、己の早漏が恥ずかしい。
　猛は、客たちを愉しませられなかった己が情けない。
　猛は、この場を設定した八幡の顔に泥を塗ってしまった己が無様で仕方がない。
　自覚がないとはいえ、痛みを伴わない辱めを求める猛は、客たちの侮蔑に対し、怒りを抱くことはない。

猛は、恥ずかしさと居た堪れなさで震えることしかできない。
見事な筋肉美を備えたイケメンの猛が、早漏であることを侮蔑され、見下され、左手にザーメンを受け止め、尿道にザーメンを残したままの姿で、恥辱に震えている。
なまじ、イケメンであり、見事な筋肉美を備えているからこそ、早漏であることを侮蔑され、見下され、オナニーの後始末も許されない猛の惨めさが際立つのだ。

「ああ、こんなに男臭いザーメンをしているのに、大人の男になる資格がないなんてな」
「世間の早漏だって、お前より頑張ってチンポセックスできるってのになあ」
「デカチンぶら下げて、男ですって顔するなよなあ、俺たちに申し訳ないと思わないのか？」
「悪質な詐欺よねえ、男らしい身体をしておいて、どうしようもない底辺早漏じゃあねえ」
客たちは、猛が恥辱に震え、侮蔑に耐えている姿を愉しんでいる様子で、侮蔑が留まることはない。
次々に、言葉を変え、言い回しを変え、客たちは猛の早漏を侮蔑し、見下し、嘲笑する。
筋肉美を備えたイケメンである猛を辱めるための侮蔑を紡ぐことは、カラオケで気持ちよく歌うよりも、客たちにとって、素晴らしい時間なのだろう。

「ああ、さすがは高坂、カラオケよりも客たちを愉しませているじゃないか。
もうしばらく、皆を夢中にさせてくれよ」
八幡が、客たちの侮蔑を浴びせられ、羞恥と申し訳なさに縮こまる猛を見つめ、満足そうに笑っていた。

第３話　淫欲発散ごみ箱射精

とある繁華街のカラオケスナックにて、猛は全裸になっていた。
猛のケツマ〇コを開発してくれた恩人である八幡に呼び出された猛は、《大人の男大学》入学試験という名目で二次性徴の実物提示試験を己の裸体で行い、そして、クソ雑魚早漏であることから《大人の男大学》にふさわしくない不正受験野郎として罰せられ、全裸スパンキングと卑猥な落書きを裸体に施されたのだ。
猛は、色白の肌と剣道で鍛えた筋肉が調和し、西洋彫刻のような健全美を備えている。
チン毛以外の体毛が薄いこともあり、全裸で街角に立っていたとしても露出行為ではなく、何らかの前衛アートではないか、と見る者に錯覚させるほど、猛は清潔感のあるイケメンなのだ。
もっとも、その裸体は今、不正受験への懲罰によって貶められている。
クソ雑魚底辺早漏の分際で《大人の男大学》に不正受験をしたことへの罰としてスパンキングを重ねられた猛のケツは、戯画の猿のように真っ赤に染まっている。
右の裏太ももには大きな文字で「平常時 11.6cm、勃起時 23.7 cm」と記され、左の裏太ももには同様に「《大人の男大学》不正受験者」と記されている。

排泄器にして生殖器であるにもかかわらず清潔感があると評される猛のデカチン、ペットボトル早漏チンポと同級生たちに笑われているデカチンの裏側には「《大人の男大学》不正受験者」と記され、鶏卵Ｓサイズの金玉を収める玉袋の裏側には「落第」と記されている。

そして、猛を辱める落書きが施された猛の背面は、記念としてカラオケスナックの客たちに撮影され、彼ら、彼女らのスマートフォンに保存されている。

ごく普通の男ならば、羞恥に震え、悔し涙を流すのだろう、と猛は思う。

けれど猛は、背面画像を撮影されたことを恥ずかしいと思うものの、悔しいとは思わなかった。

猛は、猛のケツをケツマ〇コに開発してくれた八幡に感謝し、恩義を感じている。

猛のケツが、ケツマ〇コとして開花したおかげで、猛はアナルセックスの快感に耽ることができるようになったし、寮の仲間たちとアナルセックスを通じて絆をより深く結ぶことができた。

今の猛は、ケツマ〇コの快感を手放せないと感じている。

だからこそ、ケツマ〇コを開花させてくれた八幡の頼みに応え、辱められることは八幡への恩返しとして必要なことなのだ。

後にマゾヒズムを開花させる猛は、大学入学前の今はまだ、己のマゾヒズムを自覚していない。

痛みを伴わない恥ずかしい命令に屈服させられたいというマゾヒズムを秘めながらも、この頃の猛はまだ、己の淫貪さを自覚できていない。

だから猛は、今夜の一連のプレイも「恩義のある先輩への恩返しとしての忍従」と思い込んでいる。

客たちが帰り、カラオケスナックのマスターと八幡と 3 人だけになった猛は、勃起したままのペットボトル早漏チンポを見下ろした。

猛のペットボトル早漏チンポは勃起すると 23.7㎝ もある。

愛用している赤いボクサーパンツにも収まらないし、勃起角度が高いから自然なポジションでしまおうとするとスラックスの腰回りを飛び出してしまう。

萎えさせるために手っ取り早い方法は、やはり、オナニーからの射精だろう。

猛はクソ雑魚底辺早漏であり、ちょっとシコればすぐに絶頂する情けないチンポだ。

カラオケスナックのトイレを借りてシコらせてもらえれば、萎えさせられるだろう。

「すいません、トイレをお借りしてもいいでしょうか？」

猛は閉店準備をしているマスターに尋ねた。

「駄目だ」

だが、マスターより先に八幡が猛の質問に答えた。

「高坂、お前は見掛け倒しの早漏のくせにザーメンが臭い。

こんなに広い店内でも、お前がぶっ放したザーメンが臭いのなんの」

八幡がわざとらしく鼻を摘まみながら店内を見回した。

《大人の男大学》への入学試験という名目で行った二次性徴の実物提示において、猛は射精の説明としてオナニーをし、射精をした。

射精してからしばらくの間、懲罰という名目でスパンキングを受けていたのだが、それで

もなお、店内には猛のザーメンの臭いがわずかに残っている。
　八幡の指摘通り、クソ雑魚底辺早漏の分際で猛のザーメンは雄臭いのだ。
　クソ雑魚底辺早漏なので、チンポとして役に立つことなどないくせに、ザーメンの臭いだけはいっちょ前に雄なのだ。
「狭いトイレでお前がオナニーなんてしたら、もう、こびりついて薄れないだろうな。
　クソ雑魚底辺早漏のくせにチンポセックスへの未練にしがみつくような惨めったらしい負け犬ザーメンの臭いがな」
　八幡の嘲弄に、猛は肩を縮め、「すいません」と呟いた。
　八幡の嘲弄は、猛にとって当然のことである。
　猛自身、己のザーメンを臭いと感じているし、アナルセックスで絆を深めた寮の仲間たちも、猛のザーメンは人並み外れて臭い、と笑っていた。
「つーか、お前のデカチンなんて、チンポセックスの役に立たないクソ雑魚底辺早漏なんだ。
　萎びたバルーンの模造刀にも劣る、粗悪品どころか、劣悪不用品、いや、廃品だよな。
　そんなものがはみ出ていたって、大人の夜の街なら鼻で笑われて終わりだ」
　八幡の容赦のない酷評に、猛は恥ずかしさが極まり、裸体を大きく震わせた。
　猛自身、己のペットボトル早漏チンポを恥ずかしく、みっともない粗悪品だと感じている。
　見かけだけは立派なずる剥けデカチンなのに、同級生たちにも「酷い早漏」「酷すぎる早漏だからデカチンでもまったく羨ましくない」と散々な言われようであった。
　コンプレックスであるペットボトル早漏チンポへの容赦のない酷評に、猛は消え入りたいほどに恥ずかしく、情けない思いをする。
　ギュウウウウウと猛の下腹部が縮み上がった。
　己のマゾヒズムへの自覚のない猛は、緊張と恥ずかしさで身体がおかしくなっているのだ、と思う。
　そして、恥ずかしくて情けなくて仕方がないのに、ケツを使ってもらったわけでもないのに下腹部が疼いてしまう己を、みっともないと感じてしまう。
　消え入りたいほどに惨めで、どうしようもなく恥ずかしいのに、ペットボトル早漏チンポがギンギンに勃起したままであることもまた、猛の心を追い詰めていく。
「店じまいが済んだら鍵をかけるし、そろそろ服を着てくれないか」
「は、はい……」
　マスターに促され、猛は赤いボクサーパンツを手に取った。
　そして足を通し、腰まで引き上げる。
　ボクサーパンツのゴムを超えて、ずる剥け亀頭が童貞ピンクを強く主張している。
　平常時でも太さ、長さともに常人を超えている猛のペットボトル早漏チンポは、勃起することでますます太く、長く、硬くなっている。
　ボクサーパンツのゴムと腹筋の間にはフル勃起ペットボトル早漏チンポを挟んでいることによる隙間が大きく開き、チン毛まで見えてしまう。
　ボクサーパンツのゴムも大きく盛り上がっている状況では、スラックスを穿いてもボタンを止められそうにない。
　猛は、ギンギンに勃起しているペットボトル早漏チンポを情けなく思う。
「クソ雑魚底辺早漏のくせに、主張が強いな。

クソ雑魚底辺早漏ですって、世界中に自虐したいのか？」
「す、すいません……」
ボクサーパンツから飛び出すフル勃起ペットボトル早漏チンポへの酷評に、猛は頭を下げ、謝罪する。
それでもなお、猛の下腹部はギュンギュン疼いている。
恥ずかしいのに、どうしてこんなに疼いているんだ……
マゾヒズムが開花していない猛は、コンプレックスであるペットボトル早漏チンポへの酷評で疼いてしまう己が、みっともなくて仕方がない。
「高坂、その謝罪は、クソ雑魚底辺早漏を世界中に自虐したいって意味か？」
「い、いえ、みっともないものを見せてしまい、申し訳ないという謝罪です」
八幡の詰問に、猛はペットボトル早漏チンポがみっともないものだ、と返答した。
猛は、ペットボトル早漏チンポを、恥ずかしく、みっともないと思っている。
人並み外れて清潔感のあるイケメンとはいえ、猛にも他の男たちと同じようにチンポを「息子」、あるいは、「己の男性性の証明」と感じる心がある。
ケツマ〇コの奴隷と己を称し、アナルセックスに耽溺している猛でさえ、チンポに己の男性性を投影するときがある。
見掛け倒しのクソ雑魚底辺早漏でしかないペットボトル早漏チンポは、猛の男としての無様さ、みじめさ、情けなさを糾弾する物証である。
そのことを己の口で、己の言葉で証言することは、己の男らしさを自己否定することでもある。
クソ雑魚底辺早漏でしかない高坂猛は、クソ雑魚底辺の男なのだ。
少なくとも猛は、己の男性性をこのように感じ、恥じているのだ。
「みっともないと思うのなら、萎えさせてしまえばいいんじゃないか？」
だが、八幡はサディスティックな笑みを浮かべ、猛を追い詰める質問を放ってきた。
猛としても、勃起したままのペットボトル早漏チンポを萎えさせたい。
だが、何か誤作動を起こして下腹部から疼いているフル勃起ペットボトル早漏チンポは、自然に萎えそうにない。
己のマゾヒズムへの自覚がない猛は、八幡による言葉責めで辱められることに興奮している自覚を持てない。
だから、誤作動を起こしていると思い込むしかなく、誤作動を起こすような情けないペットボトル早漏チンポへの恥ずかしさも増していく。
「すいません、ギンギンになったまま、萎える気配がないのです」
猛は八幡に頭を下げ、ペットボトル早漏チンポが勃起し続けていることを詫びる。
「そうか、クソ雑魚底辺早漏の分際で、オナニーして萎えさせたいか？」
「はい、オナニーをさせてください、お願いします」
八幡の問いかけに、猛は深く頭を下げて八幡に願い出た。
ボクサーパンツに収まらないフル勃起ペットボトル早漏チンポが猛には恥ずかしい。
今日はスラックスで来たため、このままではスラックスのボタンも止められそうにない。
だから猛は、ペットボトル早漏チンポを萎えさせるためにもオナニーをさせてほしい。
「おいおいおいおい、オナニーをさせてくださいなんて、高坂、お前、はっずかしいなあ」

八幡に嘲笑され、猛は恥ずかしさで身体を縮こまらせる。
それでもなお、猛のボクサーパンツに収まりきらぬフル勃起ペットボトル早漏チンポは、忌々しいほどに存在を主張している。
「お前のチンポは、劣悪不用品にも劣る廃品、いや、ごみ収集業者でも引き取り拒否をする産廃じゃないか。
そんな産廃からクソ雑魚底辺早漏汁を垂れ流したいってのか？」
情けが微塵もない八幡の嘲笑に、猛は顔を赤く染める。
ここまで見下され、嘲笑されるペットボトル早漏チンポを、猛は情けなく思う。
その一方で、猛は八幡の侮蔑に対して怒りを抱くことはない。
体育会系としての序列、そして、おチンポさまとケツマ〇コの奴隷としての序列、何より、猛自身、ペットボトル早漏チンポを弁解のしようなどない劣悪極まりない粗悪品として恥じているためだ。
猛は、八幡の前で土下座をし、額を床に擦りつける。
「お願いします、オナニーをさせてください」
猛は、ペットボトル早漏チンポを萎えさせ、ボクサーパンツに収めたい一心で八幡に哀願する。
猛を見下す八幡が、にやりと笑っている。
求める前に、土下座をする猛を見下し、支配者としての充足感を笑みとしてあらわしている。
「だったらまず、パンツを脱ぎな」
「分かりました」
ケツマ〇コを開花させてくれた八幡の命令に従い、猛は立ち上がり、一度穿いたボクサーパンツをもう一度脱いだ。
ボクサーパンツのゴムに押さえつけられていたフル勃起ペットボトル早漏チンポが大きく揺れた。
「土下座はしなくていいから、腰の後ろで手を組んで、俺の言葉を復唱しろ」
「分かりました」
八幡の命令に従い、猛は腰の後ろで手を組んだ。
猛にとって最大のコンプレックスであるフル勃起ペットボトル早漏チンポが丸出しになっている。
フル勃起ペットボトル早漏チンポは我慢汁に濡れて卑猥な艶を放っている。
秘めたマゾヒズムの自覚がない猛は、どうしてこんなことで我慢汁まで溢れてしまうのか、訳が分からない。
「劣悪極まりないクソ雑魚底辺早漏のクソ雑魚底辺早漏おしっこのお漏らしをお許しください」
「劣悪極まりないクソ雑魚底辺早漏のクソ雑魚底辺早漏おしっこのお漏らしをお許しください」
羞恥に顔を真っ赤にした猛は、己の男性性を徹底的に辱める文言を復唱した。
己の男性性の象徴であるチンポを貶める文言を口にする猛は、羞恥に身体を震わせている。

ペットボトル早漏チンポを強く恥じ、コンプレックスにしている猛の顔は、羞恥の見本として展示できるほどに哀れな様子であった。
普通にしていれば清潔感溢れる爽やかなイケメンが、ペットボトル早漏チンポを恥じ、顔を歪ませているのだ。

西洋彫刻のような魅力を備えた筋肉質の裸体、ずる剥けで立派な外見のチンポをぶら下げていながら、猛はペットボトル早漏チンポを恥じている。
見かけだけは立派なずる剥けデカチンでありながら、チンポセックスの土俵にも立てないクソ雑魚底辺早漏であることを、猛は心の底から恥ずかしいと感じている。
清潔感溢れる爽やかな顔立ちも、剣道で鍛えぬいた筋肉も、猛の男性性を支えることはできない。
クソ雑魚底辺早漏である猛は、見かけがどれだけ立派なイケメンだろうとも、チンポセックスを完遂できるはずがない。
生殖における種付けの役割を果たせない以上、猛は、惨めで哀れなクソ雑魚底辺早漏だ。
このことは、猛自身が一番強く感じ、そして、心の底から恥じていることなのだ。

そして、猛がクソ雑魚底辺早漏を強く恥じていることは、見る者の嗜虐心を強く煽り立てる。
なまじ、立派な見かけをしているだけに、クソ雑魚底辺早漏という分かりやすい弱点が際立つ。
猛がクソ雑魚底辺早漏であることを恥じているからこそ、見下し、嘲笑い、玩弄できるのだ。
八幡は、支配し、蹂躙する征服の悦びに笑みを浮かべている。
卑しい言葉を、己を貶める言葉を従順に繰り返す猛を気に入り、かわいがってやろうという欲求が、目つきに現れている。
「クソ雑魚底辺早漏おしっこは、とても臭い汚物です」
「クソ雑魚底辺早漏おしっこは、とても臭い汚物です」
八幡の言葉を復唱する猛は、己の男性性、男としての性機能を貶める罵倒を口にする屈辱に、ケツの奥から震えている。
己のマゾヒズムを自覚していない猛は、ケツマ〇コ開花の恩義がある八幡に従うしかない、と決意している。
その決意の中に、「恥ずかしい命令に屈服させられたい」という己の欲が根を這っていることに、猛はまだ、気がついていない。
「とても臭い汚物なので、ごみ箱の中がお似合いです」
「とても臭い汚物なので、ごみ箱の中がお似合いです」
己の男性性の投影であるペットボトル早漏チンポからぶっ放すザーメンについて「ゴミ箱の中がお似合い」と口にした猛は、情けない、と腹の底から感じた。
チンポセックスの役に立たないクソ雑魚底辺早漏がぶっ放すザーメンは、その程度なのだ、と見下されても仕方がないのだ、と猛は感じている。
「じゃあ、パンツだけをもってついてこい」

「分かりました」
　八幡の命令に猛は頷いた。
　そして、赤いボクサーパンツを持ち、全裸のまま、八幡の後ろをついて歩く。
　八幡は、トイレの横にある裏口のドアを開けた。
　全裸で、しかも、ペットボトル早漏チンポを勃起させたまま外に出ることに、猛は戸惑ってしまう。
「来いよ、誰にも見られてないから安心しろ」
　だが、ケツマ〇コ開花の恩義がある八幡に手招きをされては、従わないわけにはいかない。
　恩義のある八幡の命令を拒むことは、仁義にもとることだ。
　猛はそう信じ、カラオケスナックの裏口から路地裏に出た。

　三月下旬だというのに、路地裏は少し暑かった。
　隣り合う店の空調の室外機が回っているせいで、三月下旬の陽気よりも少し気温が上がっているのだ。
　八幡の言うように路地裏は無人であったが、ゴウゴウと響く室外機の音のせいで道路の側で全裸になっているような錯覚をしてしまう。
「ほらよ、お望みのごみ箱だ」
　八幡が、路地裏に置かれたごみ箱を指さした。
　ゴミ箱は金属製で、蓋には留め具がついている。
　野良猫やカラス、ネズミに漁られないための工夫なのだろう。
「クソ雑魚底辺早漏がお漏らしするクソ雑魚底辺早漏おしっこは、ごみ箱がお似合いだからな。
　この中にぶっ放せよ」
「分かりました」
　猛は八幡の命令に従い、ごみ箱に近づいた。
　室外機が排出する空気のせいで路地裏の気温は上がっており、猛の裸体にうっすらと汗が浮かぶ。
　猛はごみ箱の留め具を外し、蓋を開けた。
　ビニール袋で縛られているとはいえ、生ごみの臭いがむわっと立ち込める。
「ゴミの臭いも、お前のザーメンの臭いも、大差ないよな」
　八幡の嘲笑に猛は「はい」と頷く。
　猛のペットボトル早漏チンポは、こんな状況だというのにギンギンに勃起し続けている。
　勃起し続けているペットボトル早漏チンポが、猛はとても恥ずかしい。
　とにかく、さっさと萎えさせてパンツを穿き、服を着てしまいたい。
　猛のペットボトル早漏チンポは勃起角度が高い。
　また、ごみ箱も猛の太ももの付け根ぐらいまでの高さがある。
　少し考え、猛は赤いボクサーパンツを裏口の地面に落とした。
　そして、腰を少し落とし、ケツにギュッと力を込め、左腕でごみ箱を少し傾けた。
　続いて猛は、右手でフル勃起ペットボトル早漏チンポを握り、ずる剥け亀頭をごみ箱の中

に向けた。
　情けない姿だ、と猛は感じた。
　ペットボトル早漏チンポを萎えさせるために許されたオナニーは、ごみ箱の中にぶっ放すオナニーだ。
　ゴミ箱の中にザーメンを、いや、クソ雑魚底辺早漏おしっこをぶっ放すためにケツに力を込め、左腕で金属製のごみ箱を支え、チンポを握りしめる己の姿は、誰が見ても情けないだろう。
「そら、さっさとシコって萎えさせな」
「はい」
　八幡の許可を得た猛は、そのままペットボトル早漏チンポを握り、シコシコした。
　金属製のごみ箱を傾ける左腕には血管が浮かび上がっている。
　シコシコと扱くだけで、猛はケツの奥から濁流が突き抜けてくるような気分になる。
　１分もしないうちに、猛は中腰になったケツをガタガタと震わせる。
　クソ雑魚底辺早漏なので、ちょっと扱いただけで、イってしまうのだ。
「あああっ！　んんんっ！」
　喘ぎそうになった猛は慌てて口を閉じた。
　いつも通りの早さで猛は、ケツの奥から突き抜けるような射精の予感に身体を震わせた。
「んんんんんっ！！！！！！！」
　猛は左腕にギュッと力を籠め、ごみ箱を倒さぬように気をつける。
　力んだ猛のケツもギチギチと揺れる。

　どっびゅるるるるる！　どびゅるるるる！　どびゅる！　びゅる！　びゅるるる！　どびゅるるるるる！　どっびゅるるるるる！　どびゅる！　びゅる！　びゅ！　びゅ！　どびゅるるるる！

　猛のペットボトル早漏チンポからぶっ放されたクソ雑魚底辺早漏おしっこがごみ箱の中にまき散らされる。
　ごみ箱にしまわれた生ごみの袋に猛のクソ雑魚底辺早漏おしっこがべちゃべちゃとぶっ放される。
「はあ……はあ……」
　射精の解放感に猛は蕩けた顔で喘いでいる。
　猛の喘ぎに合わせて引き締まった腹筋が収縮し、ごみ箱を傾けるために中腰になっているケツもブルブルと揺れている。
「はあぁぁぁぁ」
　射精への満足感をもう一度喘いだ猛は、ごみ箱を元の姿勢に戻した。
　《大人の男大学》入学試験でも射精をしたためか、猛のペットボトル早漏チンポが萎え始めている。
　肉体的には、射精によって満足できたと見なすこともできるだろう。
　ただ、猛はどことなく、物足りないと思った。
　寮の仲間たちにケツを差し出し、使ってもらったアナルセックスに比べると、オナニーは

どうしても物足りない。
　ケツの奥から揺さぶられるような激しい絶頂は、手コキでは得ることのできない解放なのだ。
「悪いな、高坂。
　今、気がついたんだが、いいか？」
　射精の余韻と、ケツを使われなかったことへの物足りなさに沈んでいた猛は、八幡の呼びかけに振り向く。
「なんでしょうか、八幡さん」
　猛の問いかけに、八幡が意地の悪い笑みを浮かべていた。
「お前のクソ雑魚底辺早漏おしっこさ、生ごみじゃなくて産廃だろ？
　このごみ箱は生ごみ用だから、お前のパンツできちんと拭って綺麗にしないと駄目だなって、今、気がついた」
　「今、気がついた」という八幡の言葉は、通りすがりに耳にしたのならが、とってつけたようなわざとらしさを感じただろう。
　けれど猛は、八幡の言葉を疑わない。
　体育会系の常である先輩後輩の上下関係だけではない。
　自覚をしていないだけで、猛は、恥ずかしい命令に屈服させられたいのだ。
「分かりました」
　猛は八幡の言葉に従い、地面に落としたボクサーパンツを拾う。
　そして、ごみ箱に向かって身体を屈め、腕を伸ばし、生ごみの袋を汚す己の絶頂排泄物を拭い始めた。
　猛の姿は、端から見れば滑稽なものだ。
　繁華街の路地裏で、剣道で鍛え抜かれた筋肉と色白の肌によって西洋彫刻のような魅力を備えた青年が、全裸で、ごみ箱に向かって身体を屈めているのだ。
　それも、ごみ箱の中にぶっ放した絶頂排泄物を綺麗にするため、己のパンツで拭っている姿だ。
　ごみ箱の中を拭うため、身体を屈めている猛のケツがくの字に突出している。
　引き締まったケツは、武道に生きる者の屈強さを備えている。
　けれどこの屈強なケツは、数多の男たちを迎え入れ、チンポを咥えこんできた淫蕩なケツだ。
　雄肉が詰まったケツの奥に潜むケツマ〇コは、貪欲なまでにチンポを迎え入れ、もてなし、抱きしめ、味わい尽くし、絞り上げる淫乱の権化だ。
　八幡のいやらしい目線は、猛のケツに注がれている。
　猛のケツを何度も突きまくった寮の仲間たちのように、八幡の顔にも猛のケツマ〇コへの欲求が浮かび上がっている。
　猛はそんなことも知らずに、ごみ箱の中を己のボクサーパンツで拭っている。
　赤いボクサーパンツは、猛がぶっ放した絶頂排泄物によって白く汚れていく。
　猛の射精量が多いため、ごみ箱の中を清掃するだけで猛の赤いボクサーパンツは着用を躊躇うほどに白く、臭くなっていく。
「終わりました」

猛は、己の絶頂排泄物で汚れたボクサーパンツを握ったまま、姿勢を直し、八幡に向き直った。
八幡が猛に近づいていく。
「ごくろうさん」
「ありがとうございます」
八幡の労いに、猛は頭を下げた。
猛の目の前に立った八幡の手が猛の腰を掴む。
「お前さ、ここのところ、欲求不満じゃないか」
問いかけと同時に、八幡の手が猛の腰から雄肉が詰まるケツに向かう。
「使ってもらってないんだろ、寮を出てから」
「ひうっ！」
ケツを撫でまわされながらの問いかけに、猛は顔を赤くし、妙な声を発してしまった。
アナルセックスに耽溺するほどに、猛の性欲は強い。
けれどその一方で、己の淫乱さを口にすることを恥ずかしがるほどの羞恥心も備えている。
強い性欲と強固な羞恥心の相乗効果によって、アナルセックスについて問われたことに対し、猛は過敏に反応してしまったのだ。
けれど同時に、八幡の問いかけで猛は思いついた。
今夜の勃起は、カラオケスナックの客たちが去ったのちも、猛のペットボトル早漏チンポが勃起し続けていた原因は、アナルセックス不足だったのだ。
実をいうと猛は、卒業記念にディルドを贈られている。
それも、ペットボトル早漏チンポを模したディルドだ。
だが、猛はアナニーすら、していない。
実家暮らしのため、何らかの行き違いで家族にアナニーを目撃されてしまったら、という不安で、猛はディルドを箱から出すこともできなかったのだ。
思い返せば思い返すほど、猛は今夜のいやしい勃起の原因がアナルセックス不足であると確信していく。
「高坂、お前、かわいいな。
羞恥心が強くて、性欲も強くて、何より、ケツが極上だ」
「あ、ありがとうございます……」
八幡にケツの具合を褒められ、猛は恥ずかしさを抱く一方、このままケツを使ってもらえないだろうか、と期待してしまう。
八幡は、猛のケツマ〇コを開花させてくれた恩人だ。
猛は、八幡にケツを使ってもらえることを期待してしまう。
萎えたばかりの猛のペットボトル早漏チンポがムクムクと勃起し始める。
「明日の夜、もう一度、ここに来いよ、高坂」
「え……」
八幡の囁きに、猛は驚いた。
このまま、ケツマ〇コをぶち犯してもらえる、と期待をしていた猛は、明日の夜、という言葉がショックであった。

「明日の夜、ここに来たら、裏口入学させてやるよ。
《大人の男大学》に、な」
八幡にケツ肉をぎゅっと掴まれ、猛はぞくぞくしてしまう。
八幡の指に込められた欲望から、猛は八幡の猛りを、素晴らしいアナルセックスを想像してしまう。
八幡にケツマ〇コを開花させてもらったとき、猛は快楽に流されるだけで、八幡とのアナルセックスを味わう余裕がなかった。
猛のアナル処女を散らした男でありながら、猛にとって、八幡はある意味、未知の男、未知のチンポである。
性知識や下ネタに疎い猛でも、ケツを掴む指先から、裏口入学の意味を察してしまう。
明日の夜、ケツマ〇コを使ってもらえる。
「必ず、お伺い、します……」
先輩後輩の序列だけではなく、ケツマ〇コを使ってもらえることへの期待から、猛は従順に返事をしたのだった。

奥付

サンプル版　『マゾマン高坂猛シリーズ 03　マゾマン高坂猛の淫故恥新』

初出：2026 年 10 月 30 日
作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】
https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005

【DLsite がるまに　金目堂サークルページ】
https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【Ci-en　金目堂】
https://ci-en.dlsite.com/creator/34371

【金目堂活動報告】　個人ブログ
https://kinmedo-diary.sblo.jp/
　支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】
https://twitter.com/chigaya_deep
　同人誌や支援サイトの更新告知に用いています。